

氏名	小川 実加子
ヨミガナ	オガワ ミカコ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第293号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 邦楽囃子（小鼓）の手ほどきにおける実践研究 〈演奏〉 三木稔「ダンス・コンセルタント第1番-《四季》」 木村富子作詞・四世杵屋佐吉作曲「黒塚」

#### 論文等審査委員

主査	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	盧 慶順
副査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	萩岡 松韻
副査	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	佐野 靖
副査	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	味見 純
副査	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	テシュネ ローラン

#### （論文内容の要旨）

##### （1）研究の目的・背景と動機

本研究は、邦楽囃子の導入期の指導について、実践研究を通して対象者別の指導方法を提示することが目的である。

邦楽囃子の一般的な稽古は、長唄の古典曲を主体としている。楽器の扱いを教わるとすぐに、比較的分かりやすい曲目を導入曲とし、初めて聴く三味線の旋律に合わせ、囃子を教わる。できない箇所を抜き取り、そこを重点的に練習することはあるが、囃子の手組だけを先に習得し旋律に合わせるといふ、囃子からの導入はあまり行われぬ。そのため、それぞれの手組や、構造が分かっているうちから古典曲に入ってしまう、学習者は初期段階で苦手意識をもってしまふことが少なくない。初学者の苦手意識を回避し、なおかつ古典曲に根ざした導入期の指導を充実させることで、古典曲へ移行した時により円滑な楽曲理解を可能にするのではないかと考えた。本研究は、手組という邦楽囃子の構造を活かし、口唱歌を取り入れながら、幼児・小学生・成人を対象とした年齢別の実践研究を行うことで、これまであまり行われてこなかった古典以外での練習法や、段階を踏んだ稽古法を実践し、その結果から囃子の手ほどきに関する考察を行う。

##### （2）研究の方法と実践の概要

研究の方法は、以下の通りである。

- ①幼児・小学生・成人それぞれを対象にした、小鼓の指導実践プログラムを計画する。
- ②計画に沿って、3種類の小鼓の指導実践を行う。
- ③実践における子どもたち、児童ら、受講者らの様子を分析し、成果と課題を考察する。

幼児を対象としたワークショップでは、手組単体を切り取った学習を行った。〈三番地〉と〈鈴の手〉を題材とし、手組と唱歌と関連付け展開する。実践では主に楽器を用いず、手を叩くなどして実践を行ったが、楽器がなかった時の打開策として小鼓に見立てた筒楽器を作成し、実戦に応用した。それぞれの手組のワークショップを行う過程で、唱歌を聴くことや、指導者の真似をしながら、掛け声、コミをとる、ノリの変化という、邦楽囃子における演奏で重要な点を実践した。小学生対象の指導実践では、オリジナル曲「すっぽんぼん体操」を通して邦楽囃子の手組を古典曲以外から学習した。「すっぽんぼん体操」を通して学んだ手組を使って、童謡へ手附を行い、より手組単体の理解を深める実践を行った。成人対象の指導実践では、成人を対象とした指導実践では、一般的な稽古においても手ほどきの曲として使われている長唄《雛鶴三番叟》を教材とし、実践を行った。学習者が初期段階で苦手意識を持つてしまう要因のひとつに、それぞれの手組や構造が分かっているうちから古典曲の指導に入ってしまうことがあると筆者は考え、囃子の手組における理論指導として〈チリカラ拍子〉と〈トッタン拍子〉の説明を実技練習や楽曲理解と並行して行った。

##### （3）結論

いずれの対象者にも共通して指導することは、実際の音と口唱歌をリンクさせて聴くことである。これは邦楽囃子の導入期の初めにおいて習得、あるいは習得への足がかりを築いておく必要があると言える。本研究においては、口唱歌を歌うことやツケを読むこと、実際に手附を行うこと、方略は様々ながら手組自体に初めから向き合うことを心がけ実践を行った。一旦楽曲から離れた理解を試みることで、自分がまだ学習をしたことのない曲を聴いた際にも鑑賞の一助となると考えられる。そして、学習が次の曲へステップアップした際により深い理解へと繋がるであろう。手ほどきとして用いられる古典曲は、《雛鶴三番叟》も含め全曲で少なくとも10分から20分ほどの長さの曲である。全曲通して囃子が演奏しているわけではないが、その曲に含まれる全ての手組を細かに学習することは行われてこなかったし、達成したとする評価の基準は、拍子盤を打つ張り扇について打てるか否かであったとも言える。継続的に数多く稽古を積み、曲数をあげる学習の機会を設けることは現状において実際困難であると言える。限られた機会をより有意義なものとするためには、これまでの稽古法を通して培われてきた邦楽囃子の習得の筋道を踏まえた、新たな指導法が必要なのである。導入期において手組単体を重点的に学習することは可能であるし、一つの手組からでも囃子の特徴的な奏法などは体験できる。本研究を通して、改めて伝統的な手ほどきの稽古の選曲や指導の合理性を確認した。そして、その積み重ねの先に新たな指導法としてこれら三種の実践を位置付けたいと考える。これまでの手ほどきにおいて用いられてきた《雛鶴三番叟》の教材性を補完するかたちで、トッタン拍子とチリカラ拍子を理解する学習を盛り込み、次の曲への足がかりをもうける。「すっぽんぼん体操」を通して手組それぞれの呼称と口唱歌を覚えることで、童謡の作調の体験への応用を容易とする。曲を数多くあげることばかりではない、学習者の側からも次の学習へと繋げることができる達成目標を、邦楽囃子のみから示すことができるのである。このわずかの期間においても、学習者は自らの課題を明確にして、それを達成することを目的として学習に励んだことは、成人のアンケート結果からも読み取れる。口唱歌を中心に用いて手組単体の理解を深めることで、学習者が自らの達成目標を見出しやすくなるのではないだろうか。もちろん、この先も継続して実践を積み重ね検証する必要があることは事実である。本研究においては、対象別の三種類の実践を通して、その成果と通底する邦楽囃子学習の重要なファクターとしての口唱歌と手

組自体の直接的な指導が持つ可能性を提示し結びとする。

(総合審査結果の要旨)

本学生の論文は、『邦楽囃子(小鼓)の手ほどきにおける実践研究』というタイトルである。古典音楽習得における、小鼓の対象者別指導方法を提示することを目的とした論文である。第1章幼児、第2章小学生、第3章成人とし、それぞれの対象者別指導方法を考案、実践研究、分析を行った。どの実践にも共通して重要視しているのは、邦楽囃子独特の伝統的口唱歌である。例えば、幼児であれば、手組みを唐突に教えるのではなく、鼓草から、「タンポポ」を連想させ、「大きなタンポポ(三番地という手組み)」に誘うという方法を提示し、長唄『雛鶴三番曳』の一部を演奏した。また、小学生には、2種類の手組みを歌詞に入れ込んだ体操曲を考案し、最初に体験してもらうことで、邦楽囃子独特の手組みの理解を深めることに繋がる結果を得た。最初に手組みを、分かりやすい音楽とともに身体を動かし、ロズさみながら体験しているので、手組みのリズム感覚や、文法的感覚が自然に身につけられ、初心者の小学生が、童曲に作調するという非常に珍しい結果を導きだした。成人に関しては、歌舞伎独特のチリカラ拍子と、トッタン拍子の二種類の理論を最初に学習することで、初学者のスムーズな指導を目指した。理論→実践、という同じパターンを繰り返したが、受講者の手組みに関する理解と演奏技能の溝を埋めるには至らず、この点が課題として残った形となった。しかしながら、この論文は、これまでの邦楽囃子の世界では考えられなかった、柔軟な発想を基にした初学者のための導入法の独創的提示となったこと、また、実践から一定の成果を導き出した点が評価される。様々な現場で応用されることが期待される。

学位審査演奏会では『ダンス・コンセルタント 第1-《四季》』・長唄『黒塚』を演奏した。現代曲と、難解な古典曲を共に演奏することは、演奏する神経が全く異なるため、非常に厳しいのだが、助演者にも助けられ、全体を冷静によくまとめ演奏しきった。長唄『黒塚』では、小鼓の技術は大変高いものがあり、様々な音色を用いた表現を客席に伝えることができた。強さや鋭さを出せれば、より厚みのある演奏になったように思う。また、『ダンス・コンセルタント 第1-《四季》』では、個々の演奏技術に関する課題は残るものの、一体感のある清々しい演奏となった。よく全体を率いていたように思う。

これらを全体に鑑み、合格という評価にいたった。